

ほかの車は、コミュニティに到着できたら助けを呼ぶといって、先に行ってしまう。

砂漠のど真ん中なので、まともな木陰すらない。気温は、四〇度を軽く超えている。動き回ってはあっという間にのびてしまう。な

るべくじっとして、少しず



**生命 あふれる 大地**  
アボリジニの世界  
□11□

保莉 実

目的の地まであとどれくらいあるのか、ラジエーターの漏水穴がどのくらいの大きさなのか、見当もつかない。漏水が分かっているラジエーターに非常用の水を使つのはあまりに危険だ。不安だが、とにかく止まって助けを待つことにした。

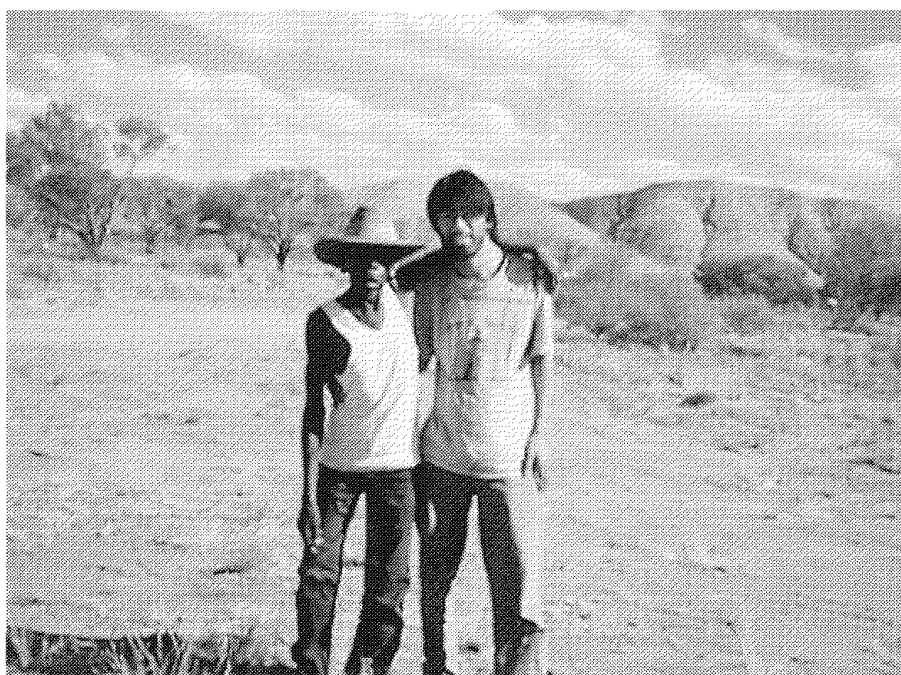
まあ、家族は悲しむだろうが、僕が死んでも経済的に困る人はいない……。あ

砂漠に1人 ①

涙涙…感動の目的地到着

そんなことを何時間もぼんやりと考えている。何時間も何時間も、ただじっと風景を見つめている……。

いや、どう考えても、あと一日かそこらで先方隊がコ



フラフラになってドッカー・リバーにたどりついた

じゃった人の話はめったに聞かない。大丈夫だ、あととでいい思い出話になるぞと……。

遠くから排気音が聞こえ、人男性だけの秘密の儀式で

ついていた。グリーンシ社会で経験した儀式とはまったく異なる歌や踊りが次から次へと披露されてゆく。もちろん、成人男性だけの秘密の儀式で

ドッカー・リバーと呼ばれるその砂漠のコミュニティに、千人を超えてアボリジニの人々が各地から集ま

び、手に手に握手をした。肩をくんだりしてくれ。感動と安堵で涙がぼろぼろでた。

僕は、はじめて出会った多数のアボリジニ男性たちの鋭い視線を感じながら、さんさん世話になってきたグリーンシの長老たちに導かれて、歌と踊りに参加した。

た。ついに助けの車がやってきた。大地は僕を見放してはいなかったのだ。ほろほろの体で目的地に到着すると、すでに到着していたグリーンシの人々は、拍手喝采で僕を迎えてくれた。大声で僕の名前を呼び、手に手に握手をした。肩をくんだりしてくれ。感動と安堵で涙がぼろぼろでた。

ないか……。それにしても暑いな……。雪山で遭難すると穴を掘って避難するらしいけど、砂漠のばあいどうするんだろう……。

ミニティに到着するはずだ。そして、助けが来る。大丈夫だ。これまでも死にそうになったという話はたくさん聞いたが、死

あり、その様子を撮影することはおろか、メモすることも許されない。すべては、現場にいる者だけが体験し記憶することを許されている。記録に残すことを許さないという、まさにその厳しさによって、アボリジニ文化の深遠さを学ぶ。グリーンシの番がやってきた。

(火曜日掲載)

(歴史学者 新潟市出身)